
明日は君を殺そう

秋臣

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

明日は君を殺そう

【Nコード】

N5719E

【作者名】

秋臣

【あらすじ】

ある病の感染源となった日から、主人公『鷹丞鳴海』（たかじょうなるみ）の恋人『春日由弥』（かすがゆや）は世界中の人々から命を狙われていた。世界の安寧より、恋人を選んだ主人公の選択は沢山の命を奪い壊していく。

プロローグ

若い男が数人で俺を追ってきた。正確に言えば俺『達』だが、仕方がないので俺は手の平を若い男達に向ける。精神を集中させ、脳みそでイメージを創る。

「テメーらの胴体は爆ぜる」すると数人の若い男達の胴体は次々に爆ぜた。

「あー失敗した。下手くそだ」

胴体が爆ぜるイメージしたつもりが……腕もろとも弾けた奴、顔が潰れた奴、その中で腹がえぐれただけの奴はまだ息がある。

「助け……」

「冗談キツイぜボーイ！その手にあるのは日本刀！俺を殺すきアリアリじゃーん！」

「じゃあどうする！？君ならどうする！？」

「助……ゲホッ」

「そーだよね！はい死刑！脳みそ爆ぜろ」

若い男の頭が四方八方に散乱する。普通なら嘔吐するなり何なりの拒否反応がでるはずだが、俺の顔には笑顔が張り付いていた。

「何を笑っているの？」

「自分が可笑しくてたまらないのさ」

「貴方血だらけよ？」

「君を守った証だぜ」

「あら、ありがとう。でももう死んでも良いのだけれど？」

疑問詞だらけの彼女に俺は答えた。

「明日は君を殺そう」

第1話 幼馴染み

最近物騒な事件が多い。今朝もテレビで報道されるのはプレス感染者による殺人、強盗、婦女暴行、等々。

「別に感染者全員が悪い訳じゃねーけどな」

「当然よ。感染者が犯罪を犯すんじゃないくて、犯罪者がたまたま感染しただけ」

「流石現役感染者」

うるさいとばかりにシッシツと手を振るのは春日由弥。俺がハナタレ小僧の時から幼馴染みだ。

背丈は成人女性の平均より少し上。腰まである艶やかな黒髪。雪のような肌。ツリ目がちの眼は気の強さを現したかのように。春日由弥は間違いなく美しい。

たいする俺は成人男性の平均より少し上の背丈。それ以外はまるで平均で取るに足らない。

「さあ、そろそろ出ましょう。行くわよナル」

「へいへい」二人そろって俺ん家を出る。同棲してる訳じゃない。

俺の両親は研究職で仕事場から中々帰ってこない。そこで幼馴染みである由弥が時々世話しに来るのだ。鷹丞の表札を後にする。鷹丞鳴海。自分でもややこしい名前だと思う。つーかどっちが苗字か一々説明を要するのが七面倒くさい。

「ナル。呆けていると怪我するわよ」

「てめえが言うな」

言ってるそばからほら……。

「きゅ!？」

変鳴き声と共に由弥が電信柱にぶつかる。。否、ぶつかりそうになる。

「またやつちゃった」

「ああ……やつちまったな」

由弥がぶつかるハズだった電信柱には無数の荊が刺さっていた。由弥の周りに張り巡らされた鋼の荊が彼女のプレスだ。鋼の荊は由弥が危険に晒されると自動で発動する。

「うっ……」

「つまらん事でしょげるな。行くぞ」

俺は由弥の手を引つ張り学校に向かう。嫌がる様子は無い。「プレス感染者は楽しそうだな」

恐怖や嫌悪、侮蔑の前にまず羨望が先に立つ。

「これがあるせいで苦しむ人が沢山いるのよ？百害あっても一利無し」

「てめえはドジから護られてるじゃねえか」

俺は顔に真っ赤な手形を映しながら学校へ向かった。

第2話 クラスメイト

始業を知らせる鐘が鳴り響く1分前に自分のクラスに滑り込む。
俺のクラスは2のA。由弥も同じだ。

「おーっす鳴海！また今日も同伴出勤か？」

ニヤニヤしながら悪友である十島太一が歩み寄ってきた。背丈は俺と同程度だが、長い金髪を後ろで縛ってある。そして悲しいかな俺より美的価値は高い。

「うるせーボケ。むさ苦しいから近付くな」

俺は顔をしかめるとシッシツと手を振る。

「そーそー。朝の憂鬱なひとは美少女のテコ入れが必要じゃない？」

「誰が美少女じゃ誰が。喩えテメーが美少女でもテコ入れなどと言う奴は守備範囲外だ」

「はいはい。別にアンタなんかにボール投げる気なんかないって」
この一々俺を腹立たしくさせるのは二条都。背丈は由弥より低いが、短髪と勝ち気な目がボーイッシュさを醸し出していた。それに粗暴な態度も男っぽさを助長している。

二人とも高校入学以来の友人だが、距離を置こうか目下検討中だ。

「どうでも良いけど……ナル」由弥が呆れたようにこちらを向いている。

「なんだ？」

「先生来てる」

教卓を見ると担任が諦めたように窓から空を見ていた。早く席に着いてやらねば今にも風化しそうだ。

「ハハハ。五郎ちゃんゴメンゴメン」

大して悪びれた様子なく、太一は席に戻って行く。

「アハハ」

都が苦笑いを浮かべながら席に戻る。悪いと思ってる分コイツのがまだマシか。

……っか、どうでも良いとは随分だな由弥。

第3話 検査

6限目を告げるチャイムが鳴り響く。

「おまえらー急いで保健室に行けー」

五郎ちゃんの言葉を合図にクラスの面々が一斉に動き出した。

はて……今日はなんだったのだろうか？

「なあ都。保健室に行って何すんの？今日身体測定だったけ？」

出遅れた都に声をかける。ちなみに由弥は既に廊下だ。アホの太一は寝てやがるからほっとこう。

「何言ってるの。プレス感染症の血液検査に決まってるじゃない。テレビでも大々的に言ってたでしょ」

「そーいやそんな事もあったような……」

この頃プレス感染者の犯罪激増してるからな。政府も気が気じゃないか。

「でもなんで学校なんだろ？そんなもん自治体に任せりゃ良いじゃないか」

何もプレス感染者は若者だけじゃない。老若男女問わずだ。だが何故か若者に発症しやすいのは確かだが。

「そんな事あたしが知る訳ないでしょーが」

行くよとばかりに都は手を振りながら踵を反した。

「さて」

俺はアホを叩き起こして教室を後にした。
独特の臭いが漂う部屋に着いた。学籍番号順に血液採取が行われている。

か行だから由弥は早いな。

「お願いします」

由弥は丁寧に挨拶をすると丸椅子に腰を降ろす。

「流石春日だね。注射されんのに全く動じてない」

「見てろ太一。化けの皮剥がれるから」

「はい。じゃあ腕だして下さい。チクっとしますよ」

「……………」

看護師の目が点になっている。

注射針が由弥の皮膚に到達する前に鋼鉄の荊が注射器を粉々にして
いた。やっぱり怖かったんだな……。

第4話 胸騒ぎ

「なあ由弥。今更血液検査なんかして政府はどうするつもりなんだろう？」

「感染者の管理が目的じゃないの？」

パフェを口に入れこちらを一瞥する事無く由弥が答える。

放課後の道草には相応しい喫茶店。そこが一番奥で俺と由弥はおしやべりに興じていた。

「なんで今更……遅くねえか？」

「人権団体とか法律の弊害とか色々あったんじゃない？でもプレス感染者の犯罪が増加してきてどうこう言ってられなくなったんでしようにね」

由弥はそう答えるとパフェを完食しダージリンに手を伸ばす。

その様は美しく、物言わぬドールの様であり、生命力溢れる羽ばたきの様だった。

「何？」

「いや、なんでもないさ」そんな彼女に見とれていたとも言えず曖昧に流した。

「そっぴゃ検査から二週間たったよな？そろそろ結果出るんじゃないか？」

俺の質問責めにうんざりした様に由弥は応える。

「その事だけど。なんで二週間も経ったって言うのにまだ気にしてるの？」

「俺も解らん。ただなんか引つ掛かるんだよ。胸騒ぎつつーか第6感って言うか。ともかく気になる」

「ナル……貴方まだブレスにこだわっているのね」

質問では無く断定で彼女は言った。

「悪いだよ。少年マンガで育ってきたんだ。人にあるまじき異端の力が現実にあるんだ。それを欲して何が悪い」

キツつと由弥が睨む。今のは失言だったな。

「人にあるまじきは訂正する。でも俺はブレス感染者になりたい。それは譲らんからな」

「……そう」

伏し目がちになった彼女は言葉を続けた。

「でもナル……これだけは覚えておいて。ブレス感染症は能力とか才能とか魔法とかじゃなくただの病気なのよ」

第5話 面倒事

「面倒な事になったな」

やがらみそうすけ

煙草をふかしながら八絡宗介はごちる。

歳は二十代半ば、短髪で覇気の無い眼。長身痩躯な身体はだらし無い制服に包まれていた。

対プレス感染者犯罪対策本部のオフィスには八絡宗介の他に10名皆一様に制服に包まれている。

「そう言うな八絡隊長。君達1番隊が先兵となるのだ。私の命は須らく実行してもらわないと困る」

莊厳な雰囲気を持つ男が八絡を窺める。口ぶりからするとこの男は対プレス感染者対策本部の長である事が窺える。

「まーやる事はやりますがね。アルゼ、コーヒーを頼む」

八絡は傍らに立つ少女にそう言うのと呆けたように虚空を見た。少女は無言で自分の隊長の指示に従う。

「大丈夫なの貴方の部隊で？」

八絡の対面に座る女が言った。

「さーね。あいつら血の気多いからなー。どうも慈悲つてもんを知らん様だし」

「じゃあさー！長官！アタシの5番隊に任せてよー！」

年端もいかぬ少女が長に向かって言い放つ。まだあどけなさを残した瞳には狂気が映っていた。

「駄目よ。5番隊は細かい事に不向きでしょ。元々大規模破壊と殲滅目的なんだし。その点私の2番隊なら対人に特化してるしこの仕事に有利かと思いますが」

「俺としてもさーちゃんに任せたいんだけどさ。迅速かつ対応力に優れたうちの部隊じゃないと色々都合悪いだろう。相手もプレス感染者なんだからな」

相変わらずテキトーに見える八絡の態度だったが正論だった。それを聞くと2番隊の隊長であるさーちゃんと呼ばれた女、沙霧^{さぎり}冴子は沈黙するしかなかった。

「つーか長官が俺達だって決めたんだからそうするしかねーっしょ？ねえ長官」

それを聞いた長官は満足そうに頷くと時計に目を送った。

「作戦決行は直ちより。よりよい未来の為に犠牲はつきもの。存分に能力を発揮しなさい。では解散」

長官の声を合図に一齐に皆が駆け出す。しかし長官の他二名が残った。

「隊長コーヒーです」

「……………遅いよアルゼ」

第6話 悪者と正義の味方

喫茶店から出た俺達は近所の公園へ足を進めた。辺りは夜の帳が落ち街灯だけが唯一の明かりだ。

「ナル。ベンチじゃなくてブランコに座りましょう。今日はブランコの気分よ」

「なんだそりゃ。別に良いけどさ」

由弥はブランコに腰かけるやいなや漕ぎはじめる。無表情に見える顔だが若干頬が緩んでいた。

「なんだ？ノスタルジックな気分なのか？」

「と言うよりセンチメンタルかしら？」

俺には違いが良く判らんがどうやらセンチメンタルらしい。センチメンタルの時はブランコなのか？

「ナル……もし仮に私が悪者で、正義の味方に狙われたらどうする？」

「質問の意図が掴めねーが正義の味方に引き渡すんじゃないかな。悪者だったらさ」

「そう。じゃあ私が悪者に狙われたら？」

「そんなもん悪者ぶっ倒して助けてやるさ」

「そう。じゃあどっちも悪者じゃなかったら？」

「どんな状況だよ。どっちも悪者じゃなかったら襲ったりしないだろ」

そんな俺の返答に由弥は不満げに顔を背けた。俺はなんと応えたら良かったのだろうか？

「やあやあ少女！こんな夜中に外出てたら変質者に捕まるよ！」

「今がそうね」

突然大声をあげながら男が現れた。身の丈は太一くらいだがピンクのモヒカンのせいで実際より高く見える。オマケに顔中ピアスだらけで変な威圧感を感じてしまった。

そんな変質者に涼やかに応える由弥もある意味異質だ。

「これは手厳しい！オレは変質者じゃなく正義の味方さ！石垣亨ってんだ！以後よろしく！」

「以後も今後もねーよ。正義の味方は悪者のところに行ってくれよ」

俺は由弥と石垣亨の間に立つ。プレスがあるとはいえ今後トラウマになる物見せられたらたまったもんじゃないからな。

「わかってないなー少年！だから此処に居るのさ」

石垣亨が制服のような服から何かを取り出し、真横に跳んだ。

「一匹目……！」

乾いた音がした。実物は映画より地味な音がするの、なんて考えてる間に弾丸は俺の横を通り、由弥を襲う。

第7話 黒滅坩堝

「……おいおいマジかよ」

弾丸は鋼鉄の荊によって弾かれていた。由弥はさも当然の様に立ち上がりスカートを掃う。

「不意打ちでしかも弾丸のスピードにも対応出来るとなると自動発動か」

先程とは打って変わり石垣亨の表情は獲物を狙うそれになっていた。

「……楽しめそうだぜ少女！」

機敏な動作で銃をしまうと、石垣亨は手から黒い液体を噴き出させた。

「デメエ……！」

間に合うか……いや間に合わせる！

俺は石垣亨に飛び付く。

「由弥！逃げろ！」

精一杯声を張り上げるが由弥は動かない。

「邪魔だよ少年！」

石垣亨は何か武術を習っているのか俺はいとも簡単に吹き飛ばされる。

鳩尾と胸が焼け付く様に痛い。

「グッ……」

吐き気を堪え、石垣亨を睨み付ける。が、俺などはなっから相手にしていないのか奴の目には由弥しか映っていない。

「良いねえ……ブレス感染者同士つてのはさ。見てみるよーオレの黒い液体。名付けて黒滅埚埜。当たると滅するぜ!!」

石垣亨の両手から黒い液体が放たれる。そんなさなかでも由弥は涼やかな表情を崩さず――

「これがナルの言う少年マンガ的な展開なのね」

なんて言いやがった。

「なんてブレスだ少女！オレのが阻まれる！？だがスピードアーツ
ブ！」

黒い液体が浚に速度を増して放たれる。

「……………」

由弥が俺を見て目配せした。視線の先は公園の入口。……逃げろって言うのかよ。

「ハーツハツハツハー！どうだ少女！黒滅埚埜の威力は！そろそろ
追いつかないだろ!？」

「汚いブレス。まるで汚水を浴びせられてるみたい」

由弥の野郎……鋼鉄の荊が押し負けてるって言うのに余裕のフリし
やがって！

「そろそろ私の負けね。最期が汚水にまみれてなんて最悪……」

「はい一匹！」

由弥は鋼鉄の荊を消し、最期まで余裕の態度を装った。

第8話 離さない

背中に熱がはしった。まるで溶けた鉄を流し込まれみたいに痛え。意識が混濁するのを無理矢理引っ込める。

「ナル……！逃げなさい！変質者は私を狙ってる」

「馬鹿野郎が！さっきの質問の答え、口だけにさせる気かよ！」

「良いねえ少年！身をていして少女を庇うとは恐れいるぜ！」

「悪者からか弱い少女を助けるのは正義の味方の役目だろ？それに少年マンガじゃオヤクソクだ！」

地面をありったけの力で蹴り、石垣亨に殴りかかる。

「だが黒滅埚塙！溶けて死にやがれ」

――避けなきゃ死ぬな。でも

「突っ込まなきゃ由弥が死ぬんだよおおお！」

恐怖を拭う様に叫んだ。

焦げ付く臭いがした。頭だけは溶かされまいと両手を交差させて黒い液体を阻むが既に両手の感覚は無かった。

「逃げる由弥！何処でも良いから駆け込め！」

頭の良い彼女なら俺を助けるにはそれしかないと悟るハズだ。なんとかそれまでもてば良いけどな。

「……チー！カッコイイけど邪魔過ぎるぜ！少年！」
ガクンと膝が折れ、俺は地面に倒れた。

「じゃあな少年！少女はぶち殺させてもらっぜ！」

石垣亨は由弥を目指して駆け出す。そうはさせるかよ。

「オイオイ……黒滅埜埜を受けて両手の感覚無いハズだろ……！」

なんとか片手で石垣亨の足を掴む。離すもんか。

「可哀相だがオイタが過ぎる少年には死んでもらう」

黒い液体が俺の全身に振り注ぐ。もう痛くも熱くもない。と言うか全身の感覚は黒滅埜埜に奪われていた。

駄目だ……この手だけは離さない！

「……化け物かよ」

石垣亨はそう吐き捨てたのが聞こえた。その直後ゴリッって音がして俺の右手は変な方向に曲がっていた。

「由弥……」

俺の右手から足をどけると、石垣亨は由弥の元に歩き出した。

第9話 傍にいますように

身体中熔けて感覚がねえ。でも解る。コイツを行かしたら由弥が死ぬって事くらい解る……！

「行かせるか……」

「おっ？」

石垣亨の足音が止まる。もう俺の手は離されたハズなのになんでだ？

「マジかよ少年！いや……少女の傍にいたのなら驚く事じゃないか」

何故だか解らないが石垣亨は今動けないらしい。

「息の根止めてやる！熔けて死ね！」

やばい。次あれ喰らったら終いだ。俺の身体……動きやがれ！

「つつ！」

祈りが通じたのか俺の身体は数メートル先に転がった。だが衝撃で身体が軋む。

「粘るねー。でも逃げてちやいつか必ず死ぬぜ！」

再度黒い液体が俺を襲う。もう一度動いてくれ！

そう念じると衝撃と共に俺の身体は吹っ飛び、黒い液体から逃れる。

まるでプレス感染者みたいだな……と言うかプレスそのものだ。け

ど考えてる暇はねえ。衝撃を与えるのが俺のプレスなら自分の身体じゃなくても良いハズだ。

「ちょこまかちょこま逃げんな！」

石垣亨の両手が俺に向けられる。良し、念じてみよう。

石垣亨は衝撃でぶっ飛ぶ。

「なにイー！？」

予想通り石垣亨の足は地面から離れ数メートル先のジャングルジムにぶつかって止まった。

「グッ！……少年！」

石垣亨の手に握られているのは拳銃。黒滅埧埧より速度がある分避け難いな。

トリガーを引くタイミングに合わせ念じる。

俺の目の前の物は吹っ飛ぶ。

「クソッ……！」

弾丸はたやすく弾き返す事ができた。

次は石垣亨本人を何とかしよう。

今まで大まかにしか標的を絞ってなかったが今度は具体的に……。

冷静になろう。どうせ感覚がないんだから痛みは無いんだ。怖がっても仕方ねえ。

「玩具に頼るべきじゃなかった！黒滅埜埜そいつを殺せ！」

石垣亨の黒い液体が放たれる。させるかよ。

「石垣亨の胴体に衝撃を放つ」

「ぐあ……」

声に出すとすんなりいけた。石垣亨は膝から崩れ落ち、そのまま動かなくなつた。

「由弥……」

なんとか石垣亨は倒したけど、由弥は無事だろうか。身体感覚はねえが損傷が激しい事は分かる。

「ちつと休憩」

俺は落ちる脛に逆らわず、そのまま意識を途切れさせた。

起きた時、由弥が傍にいますように。

第10話 白い部屋

眼を開けると見知らぬ部屋に居た。白い壁、床は木、カーテンは白だが太陽の光でまばゆく輝いている。

「ハハ……生きてた」

安堵の溜息をつく。身体感覚は戻っているが、全身が怠い。

由弥は？由弥は無事に逃げれたのだろうか。辺りを見渡したが何も分からなかった。

コンコンと扉が優しく叩かれた。俺を助けてくれた人だろうか？

「ご気分はどうですか？」

優しく微笑む少女がそこにいた。身長は由弥より少し低く細い。だが柔らかそうな栗色の髪と白い肌は安心させてくれる優しさを醸し出していた。

「良いとは言えねーけど、死んでない。助けてくれたのはあんたか？」

「ふふ。それは良かった。死んでしまっただけにもなりませんからね。助けたのは私ではありませんが、私の親しい者です」

見た目と一緒に柔らかい声だ、聞いた者に安心感を与えるような優しい声。

「後で礼を言いたいな。で、あんたはシスターなのか？」

少女はシスターの様な紺色の教会仕様の服を着ていた。初めは病院かと思っただがどうやら教会らしい。

「龍魅冷と申します」

「ああ、スマン。命の恩人にあんたは失礼だったな。りゅうみれいさんね。強そうな名前だ」

「ふふ。良く言われます。貴方のお名前は？」

「俺の名前は鷹丞鳴海。鳴海が名で鷹丞が姓だ。17歳高校2年」

「なんだが難しいお名前ですね。此处でシスターの様な事をしていく者です」

随分曖昧な仕事だな。

「お幾つなんだ？どうやら俺より年上みたいだが」

「駄目ですよ。女性に年齢を尋ねては」

叱られた。あれ、なんか心が暖かくなっただが俺は年上趣味でもマゾっ気もない。断じてない。

「龍魅さん。由弥って女の子知らないか？歳は俺くらいで気が強そうな女なんだが」

俺が助かったって事は由弥も助かったハズだ。もしかしたら近くに

居るかもしれない。

「その方でしたら別室にいます。外傷もないようで、今は朝食を摂っていらっしゃると思いますが」

「……良かった」

やっぱり由弥は助かった。しかも朝飯まで食う元気があるとは。

「そこまで連れて行ってくれないか？」

由弥が元気な姿を早く見たい。口に出すのははばかりるチープな気持ちを抑えきれず龍魅さんに願う。

「ふふ。喜んで案内します」

何が楽しいのか。龍魅さんは微笑んで俺の手を引いた。

でも何で黒滅埜埜で溶かされた身体が治ってんだ？もしかして俺のブレスなのか？

今考えても仕方ねえ。とりあえず由弥に会おう。

俺は龍魅さんに従い、部屋を後にした。

第11話 祝福と感染原

「おはよう由弥」

「おはようナル。美味しいわよコレ」

由弥はモグモグとフレンチトーストを食べている。小動物かテーマは。

「怪我不いか？」

「お蔭様だね。怪我一つないわ」

良かった。死にかけた甲斐もあるってもんだ。ん？死にかけた？

「由弥……なんで俺生きてんだろ？」

石垣亨の黒滅柑埜で身体中熔かされたハズだ。けど身体が怠い他に傷一つない。

「それは……」

「それは私のブレスです」

いままで黙っていた龍魅さんが口を開いた。

「あんたもブレス感染者なのか？」

「ええ。もっとも此処ではブレス感染者の事は顕現者と呼びますが」

「顕現者？」

此処ではって事は此処はただの教会じゃないのか？いや、ニュースとかで聞いた事があるような。

「顕現者とは神の力を微量ながら発現させる者。皆さんの様に感染した等とは言いません」

プレスはただの病気。

そう言った由弥の言葉を思い出す。

「プレスは感染症よ。それ以上でも以下でもない。神の力なんて驕りもいいところね」

「ふふ。普通の方はそうおっしゃりますね」

由弥の棘のある言葉をやんわりと受け止めるなんて人が出来てるな。

「でも春日さん。プレスとは神の祝福に由来するんですよ。もっともこれは政府が皮肉としてつけた言葉ですけど」

「あー龍魅さん。驚いて言っの忘れたが……ありがとう。龍魅さんが治してくれたんだな」

やっぱり龍魅さんが助けてくれたのか。つまり命の恩人って事になるな。

「気になさらないで下さい。神の力を行使する者の勤めですから。

それに此処まで運んできて下さったのは私ではなくレジスタンスの方ですから」

聞き慣れない言葉が聞こえた。レジスタンス？

「貴女達が反政府活動をしているレジスタンスね」

由弥がそう言うと、龍魅さんは頷いた。

「じゃあ龍魅さんは犯罪者なのか？」

「政府から見ればそうなりますね。けれど貴方達を襲ったのは政府の兵です」

「由弥を政府が？プレス感染者狩りでもしてんのか？」

いや……そんなのは不可能だ。人口の5%にもなるプレス感染者を駆逐するなんて気の遠くなる話だし、何よりメリットよりデメリットが多過ぎる。

「いえ……彼らは顕現者、貴方達の言うプレス感染者ではなくプレス感染原を狙っているのです」

第12話 どうでも良い

「感染者が神の力を行使する人間なら、感染原は天使って訳か？」

「ふふ。そうなるんでしょうか」

「龍魅さん。何故感染の大元が今になって現れるの？プレス感染症が発生したのは数十年前のハズよ」

「そうだ……。だいたい石垣亨は一匹目だと言った。そう何人も感染原ってのはいるのか？」

「いえ、感染原とは顕現者の大元ではなくプレス感染を引き起こす者の事です」

「ああ。それで合点がいった。俺がプレスを使えたのは由弥から感染したからか。」

「ナル……。ごめんなさい」

由弥が泣きそうな顔をして俺を見ていた。

「馬鹿野郎。そのおかげでテーマを助けたし、何より少年マンガみたいな能力を使えるんだぜ」

「そうです。この素晴らしい力を行使出来る人は限られている。けれど、きっと人々に役立つ事が出来るハズです」

龍魅さんは熱が入った様に話しはじめた。けど俺にはそんな事より、

由弥が気に病み過ぎないか心配だ。

「龍魅さん。その感染原に私になったせいでナルが死にかけたのよ。人々の役に立つ？神の力？どうでも良いわ！私はこんな力要らない」
激昂する由弥は久々に見た。これで三度目だな。

由弥の言葉に龍魅さんは答えない。眼を伏せたその表情からは悲哀が感じとれた。

「そうかもしれません。ですが顕現者は不等に扱われています。危険な顕現者は即収容。例え犯罪を起こさない子供だとしても。そして現在は感染原の殺害と……特殊な顕現者は誘拐されているそうです」

「誘拐？政府は何を考えてるんだ？」

「おおかた軍事流用でも考えているのでしょうか？」

由弥はそっぽを向き言い放つ。

「春日さん……」

由弥の態度に困惑しているのか、龍魅さんはオタオタしている。由弥は苛立ちを隠そうとせずに立ち上がった。

「ナル。帰りましょう。もう此処に用は無いわ。ありがとう龍魅さん。もう会う事も無いでしょうけど」

由弥が俺の手を引き歩き出す。

「龍魅さん世話になったな。ジャジャ馬が馬舎に帰りたがってるから連れていくよ」

由弥の拳を顔に受けつつ部屋を後にする。

その部屋を通って真つすぐ行くと、ステンドグラスが蔽かに輝く場所にてた。

「……本当にごめんなさい」

「馬鹿野郎。気にするな。寧ろ嬉しいんだぜ俺は」

由弥は俺を一瞥する事無く前を見ている。その肩は震えていた。

護つてやろう。龍魅さんが言った事は気になるが、今はコイツを護る意外にやるべき事が見つからねえ。

まずは由弥の家に行こう。おじさんとお婆さんの安否が気になる。

「……貴方達は堪えられるでしょうか？事の重さとプレスの業に」

第13話 家路

教会から出ると見慣れない森に出た。歩道は綺麗に整備されてるか
ら森を切り開いて造ったのか？

「じじ……隣町よ」

「知ってんのか？」

「ええ。駅を挟んで繁華街の反対だもの。普通は来ないわね」

「なんでテメーは知ってんだよ？」

俺と由弥はたいてい一緒にいる。由弥が知っている場所は俺が知っ
てる場所だ。

「猫……追ってったら」

「……阿呆」

「きゅ」

変な鳴き声をあげるな。早く由弥ん家に行こう。プレス感染者にな
ったは良いが使わなきゃならん場面には出会いたくない。

来なきゃ良かった。俺は初めにそう思った。春日家は政府の奴らに
包囲されている。

誰かの怒鳴り声が聞こえた。これは由弥の親父さんだ。

「ナル……！」

「……駄目だ。あの数じゃ無理だ。政府だってプレス感染者じゃないおじさんとおばさんに危害は加えないさ」

由弥は納得したようだが、心配するだろうな。当たり前だ。肉親だぞ。プレス感染者になったっていうのに何も出来ない自分が歯痒い。

「由弥……俺ん家に行こう。俺は血液検査時点じゃ感染者じゃなかったんだ。素性は割れてないハズだ」

由弥は無言で首を縦に振った。

「よし。見つからないように裏から行くぞ」

俺は由弥の手をひき歩いた。俺ん家までは此処から歩いて5分程度。そこまで手がまわってなければ良いが。

家についたら貴重品の確保が先決だな。逃亡するハメになるかもしれないし。あー学校いけねえ。いや、これは問題ないか。

……学校？マズイ。

「由弥。マズイかもしれん」

「何？」

「政府が学校になんらかの通達していたら俺の事も即バレバレだぞ」

そこまで頭が回らなかった自分に嫌気がさす。

「急ぎましょう。今は朝の8時前なんだから教員の方々もいらっしやらないハズよ」

「そうだな。家について準備したら直ぐ出発だ」

第14話 専属タクシー

良かった。俺ん家はまだ政府の奴らには見つかってないようだ。

部屋に入り、スタスタになった服を着替える。

お気に入りのダークグレーのシャツにしよう。インナーは夏に相応しく黒のタンクトップ。下は……黒のダメージジーンズで良いか。ベルトは白のエナメルっぽい奴にしよう。

「ナル……随分余裕じゃない」

由弥が冷ややかな眼で俺を見てる。

「スマン。つい」

急いでカードを取りに行く。

「この後どうする気？」

「どうしような？とりあえず遠くまで逃げたいが公共機関は使えそうもないしな」

奴らが政府だっていうなら警察にだって由弥はマークされてるかもしれない。頼るしかないか。あの人に。

「由弥。龍魅さんのところに戻ろう」

それしか手段は無い。レジスタンスなら何か力になってくれるハズだ。

だが、あからさまに嫌そうな顔をしている由弥。

「仕方ないだろ？俺達が頼れるのはあの人達だけなんだし」

「……そうね」

由弥は渋々頷くと窓から空を見上げた。

「行こう。コンビニで金おろしたら直ぐ教会だ」

「ええ」

家を出る。もしかしたら此処に二度と帰ってこれなくなるかと思っただけなら感慨深いものがある。プレス感染者になったのは良いが喜ばし欲しかったやまだった。

愚痴っても仕方ない。次に石垣亨みたいな奴に襲われて、絶対勝てるって訳じゃないんだからな。黒滅埚埒つたつけ。由弥のは奴のみたいに殺傷能力ないし、俺に至ってはどんな能力かすら分かってない。

そっぴいや石垣亨のプレスには名前がついてたな。

「由弥。お前のプレスには名前ないの？普通能力には個別で名前つけるだろ？」

あくまでマンガとかだけど。

「ないわ。こんな物、病名だけで充分よ」

「そーかい。じゃあ俺がつけてやる!」

「結構よ。貴方の中には名前をつけないの?」

「いやーつけたいんだがどんな能力かイマイチ分からんしさ。衝撃は起こしたんだけど。だから分かってから名前はつける」

「そう」

ケツ。興味ないってか。

家から三分程でコンビニに着く。まずは資金が必要だ。今までの貯金と生活費を一気におろす。

「由弥行くぞ」

「きゅ」

少女マンガを読んでいた由弥を無理矢理引っ張って行く。

「これからどうするの?また歩いて行く?」

「いや、調度言いたい事あったし専属タクシーを呼ぶさ」

第15話 バカッブル

「ハーイ！タクシー参上！……って誰がタクシーやねん！」

ヘルメットを地面にたたき付けるオーバーリアクションで太一が到着した。

「いやー悪い悪い。この時間ならまだ家だと思ったからな」

バイクで登校する（当然校則違反）太一なら直ぐ此处まで到着するだろうと思っただけ。

「貸し一つだからな！」

「分かってるっつーの」

「で、何か用だろ？この時間に私服って事は揉め事か？」

「どう言えば良いんだろ。俺はかい摘まんて昨日の夜から今までの事を話した。」

「……ドッキリじゃねえだろうな？」

「ドッキリで死にかけてたまるかい！だから当分学校も休むし、会えなくなる」

「そうか。大変だったな由弥ちゃん」

「いえ。私のせいでナルが危険な目にあってるんだもの。歎く暇す

らないわ」

「由弥。テメーのせいなんかじゃねーよ。俺がついてるから心配すんな」

「うん。ナルがいれば平気」

怖い目にあっただっていうのに。まったく気が強いっつーか負けず嫌いつーか。

「コラー！ラブラブすんな！イジメか！」

うるさいなー。

「おーいたのか太ー」

「テメーが呼んだんだろうが！」

「スマンスマン。冗談だ。まー隣町の教会までよろしく」

「いや、それは良いんだけどよ。どうやってお前ら二人運ぶんだよ？」

「大丈夫！テメーのバイクなら楽勝だ！」

グツと親指を立てる。デカイんだからなんとかかなんだろ。

「嫌ああああ！馬鹿がいる！馬鹿がいますよ！由弥ちゃんなんとか言ってくれ！」

「大丈夫よ」

グツと由弥も親指を立てる。

「こんのバカップル！仕方ねえな！乗りやがれ！」

俺が太一の後ろに。由弥は俺の後ろに乗る。

「ほれ。メット二個しかないからテメーが被りやがれ」

「きゅ」

ぽふつと被せる。最期に都と会わせてやりたかったな。

「さあ行こうぜブラザー！ピリオドの向こうへ！」

「任せろブラザー！飛ばすから捕まっとけよ！」

友人って良いもんだな。また会えるように頑張ろう。まずはプレスを使いこなさないと。

第16話 スローイベント

数分で隣町の丘まで着いた。此処から歩いて直ぐのところに教会がある。

「ありがとうな。助かったよ太一」

「ありがとう十島君」

「気にすんな！……また、会えるよな？」

「ああ。約束するよ」

ニヤリと二人で笑い合う。

「はい！それは無理！お兄ちゃん達此処で死んじやうから！」

小学校高学年くらいの少女がいた。石垣亨と同じ制服を着ている。髪はピンクのツインテールだったが、それより眼を引くのは狂気を宿した瞳だった。

「太一！由弥！逃げろ！」

「馬鹿野郎ッ！お前も狙われてんだろぅが！」

「だからテメーが逃げろって言っただよ！」

駄目だ。嫌な予感がする。石垣亨以上の何かがコイツにはする。

「ガキンチョ……名前は？」

なんとか時間稼ぎしなければ。由弥を龍魅さんのところまで逃がさねばなんともなるハズだ。

「遊佐麻優ゆさまゆうだよ！お兄ちゃんのお名前は？」

くそッ！由弥も太一も逃げやしねえ。

「俺はな……正義の見方だよ！」

遊佐に意識を集中する。

『ぶっ飛びやがれ！』

「よっ！お兄ちゃん遅すぎだよ。プレス自体は速いのに関動遅すぎ」

遊佐麻優は馬鹿にしたようにニヤニヤしていた。

「由弥！マズイ！龍魅さんのところに行ってくれ！死ななきゃ治して貰える！太一！都によろしくな！」

『俺をぶっ飛ばす！』

「ぐあっ！」

遊佐の方向に自分の身体に衝撃を与える。ダメージは残るが仕方ねえ。

「きゃっ!？」

遊佐にぶつかり坂道を転げ落ちる。

「イタタタ……お兄ちゃん酷い!良くもやったな」

「ケッ!ガキのくせに大人を嘗めるからだ」

「許さないんだから!あたしのプレス!スロイイベント!」

遊佐の手に二俣の槍が握られていた。ジャベリンと言う奴だろうか?

「先ずは足!」

あの小さな身体のどこに力があるのかジャベリンが高速で放たれる。

だが予告通り足に放たれた槍は速いが、場所が分かればた易く避けられる。

「ガキンチョめ!大人の速さを思いしれ!」

この調子なら援軍が期待出来るかもしれない。レジスタンスが教会にいたらだが。

「えへへ。お兄ちゃん、あたしも大人の速さ知りたいな」

「嘘だろ……」

遊佐の右手には斧が、左手には巨大なブーメランが握られていた。

はは……どうしよう?

第17話 痛い目

斧はともかくブーメランはヤバイな。回避し難い。それにあの華奢な身体の何処にあんなパワーあんだよ。

ブーメランは遊佐の身体より大きく、俺ですら持てないだろう。まあ、それを可能にするのもブレスか。

「いくよ！お兄ちゃん！」

まずは斧。それを右に跳躍し避ける。

「良く見たら大丈夫だ。避けられない速さじゃねえ」

次にブーメラン。それを地面に臥せて避ける。

なんだ……案外いけるじゃねえか。大袈裟に避ければ当たる事ねえ。

余裕とばかりにゆっくり立ち上がる。だが、そんな余裕は瞬く間に打ち碎かれた。

「どうお兄ちゃん？隊長のあたしがこの程度のブレスだと思ったの？」

視界を埋め尽くす程の槍が宙に浮かんでいた。その数は1000を裕に越えるだろうか。

「あたしがこんな重い物持てる訳ないでしょ？ブレスは身体能力まで上げてくれないんだから」

クスクスと遊佐が嘲笑する。投げた様に見えるだけで実際は宙に浮かんだ武器を飛ばしてただけか。

「ケツ！だからどうしたクソガキ。俺が負けるかよ」

強がってはみたが打開策がなんもねえ。

「はいマズは右手から」

仕方ない。実践で試すなんて博打は打ちたくなかったんだけどな。

俺の右手目掛けて数十の槍が向かってくる。

『槍を止める！』

俺が念じた瞬間半数以上の槍がその場で留まる。

良し！やっぱり俺のブレスは衝撃なんかじゃねえ。サイコキネシスみたいなもんだ。

残りの槍を跳躍で回避する。数がないなら避けるのは可能だ。

「クソガキ！痛い目見ないうちにゴメンなさいしやがれ！今なら許してやるから」

「バカだな」お兄ちゃんのブレス欠点多過ぎ！」

かなり応用きいて良いと思うんだが。遊佐の見解は違つらしい。

「もう良いや死んじゃえ」

全ての槍が一斉に放たれた。

「その対策くらい考えてるっつーの」

俺に近い数本の槍をブレスにより掌握する。その槍を回転させ他の槍を弾く。

簡単だ。ブレスの正体があったら対策なんていくらでも考えられる！

「殺しゃーしねーが痛い目見やがれ！」

槍の柄を遊佐に向けて放る。可哀相だが殺す気できたんだ。入院するくらいのダメージは受けてもらう。

「はい。バイバイお兄ちゃん」

遊佐が狂気の宿った瞳で俺をみていた。

俺が放った槍が真ん中からへし折れる。

ゴチとかグチャとか気味の悪い音が右肩から聞こえた。

……なんだこれ？

右肩は鮮血で染まっていた。そして金属片が肩口から見える。

次々とさっきの音が聞こえて俺は何故か地面に横たわった。

痛い……し、なんか寒い。

俺は身体中を自分の血液で濡らしながら意識を失った。

第18話 苦しんで死ね

「あーあ。お兄ちゃんグチャグチャ。弱いつてだめだよな」

「……後片付けは冴子の部隊に任せよ！バイバイお兄ちゃん！」

足音が遠退いていく……待てよ。やっと分かったっていうのに。

理解したんだよ。俺のブレスの使い方。

「やっと解ったんだから待てよクソガキ……！」

グチャグチャになった身体を無理矢理立たせる。当然足は足としての機能はしていない。だが俺は立てる。

「ヒッ……！」

遊佐が驚愕に眼を見開く。

「お兄ちゃん……良く身体中ミンチになってるのに動けるね？ううん、生きてるね？」

「頭と心臓だけ攻撃逸らす様にしたからな。おかげで身体中スタスタだが死は免れる」

下を向くと地面に無数の槍が刺さっている。ああ、ブレス使う時に手元や自分の上空に出したのは、そこにしか出せないんじゃないか。そこにしか出せないと思わせるためか。

実際の射程距離は数メートル。油断してるときにトドメ刺す訳ね。

ゴポツゴボって口から血が溢れてくる。ヤバイ……そろそろ限界だ。

「死ぬ前に死ね」

「お兄ちゃんが先に死んで！」

また100を越える槍が俺に放たれる。

だが高速で回避。右へ左へ、又は上下へ。

「なんで！？プレスは身体能力まであげないよ！？」

「俺のプレスは力加減さえすれば応用はいくらでもきく」

槍をかい潜りつつ遊佐の元に近付く。俺のプレスで身体を動かしながら間隙を見つける。

「動く……なあッ！」

空を埋め尽くすような武器の数々。けど関係ねえ。俺に当たる物だけを止め、後に遊佐に近付く。

あと3メートル。

2メートル。

『遊佐からの足を止める』

「発動が遅いつて言ったでしょお兄ちゃん！」

遊佐は後方に跳躍する事でプレスをかわそうとする。だが遅い。

「あぐっ！」

右足を高速で遊佐の鳩尾にたたき付ける。プレスで加速させたその一撃は、遊佐の回避運動を遥かに凌ぐ。

このまま二撃、三撃と続ける。狙いは足と首。戦闘能力を確実に削ぐ！

『遊佐の身体を固定する』

動けなくなつたところで両足を加速された蹴りでへし折る。

「きゃあああああ！」

少女らしい悲鳴だな。遊佐は涙を流しながら叫んでいた。

「けどお前が泣く資格なんてないんだよ？俺達を殺しにきたんだ。殺されても良いよな？」

「あーそう考えたら一瞬で黙らせるの惜しくなつたな〜！クククク
……苦しんで死ね」

『遊佐ね右腕を擦切る』

人間から聞こえるとは思えない音がした。

痛みで気絶した遊佐からは苦痛の声が聞こえない。

「つまんねーな。俺も限界近いし死ね」

血を出し過ぎたせいか視界がぼやける。だがこいつを殺すのに支障はない。

『遊佐の頭を潰す』

不思議と人を殺すというのに何の葛藤すらなかった。でも気持ちいいかもしれない……気持ち良い。

第19話 1番隊

「発動させたハズなのに……」

遊佐の頭は今だ健在だった。代わりに俺の腕があらぬ方に捻曲がっていた。

痛みは既にはないが頭が追いつかない。

「お前何者？余計な手間かけるなよ」面倒だからさ」

やる気の無さそうな男が遊佐の数メートル後方にいた。

「隊長やっちまって良いツスか？」

「……廃除しますか？」

気がつくとも10人余りの人間が俺を取り囲んでいた。皆同じ服を着ている。

「いや」もう瀕死だしほつとこう。アルゼは麻優を救護班に渡しといてくれ。それよりまずはレジスタンス拠点を壊滅させんのが優先事項な」

頭をポリポリ搔きながら男が言った。男の合図と同時に皆が散会していく。

もう駄目だ。力が入らない。

「お……前ら……政府の人間……だな」

くそつ。話す力さえ残ってねえ。

「まゝそうだな。俺は八絡宗介。対プレス感染者犯罪対策本部の1番隊隊長だ」

「ぺらぺらと……話し……やがって」

『八絡宗介の頭を潰す！』

「面倒臭い男だな」

やる気が感じられない男は、難無く俺のプレスを躲す。その風体からは想像のつかない速さだった。

「プレスに頼りきった麻優には悪い相手だったかな。でもある程度身体能力があればなんて事はない」

何がある程度だ。化け物みたいな速さしやがって。

「クソ……」

ヤベエ。早く龍魅さんに治して貰わないと死ぬな。

「レジスタンスの助けを期待しても無駄さ。君が何者か知らんが今頃全滅だな」

「そつとも限りませんよ」

聞いた事のある声がした。

第20話 祝詞

「リーダーの君がわざわざ出迎えてくれるなんて嬉しい限りだよ」

「別に貴方を歓迎しに来た訳ではありません。鷹丞鳴海さんはまだ息があるようですね」

会話が頭に入ってこねえ。それに寒いな……。

「その坊主は鷹丞鳴海って言うのか。面倒そうな名前だな」

『天国乖離』

なんだ？身体が暖かい。それに五感がクリアになっていくような……。

「ほーう。噂に違わぬ効力だな。瀕死の人間を完全に治癒するとは」

「復かあああああつ！助かったよ龍魅さん！復活記念に先ずテメーからミンチにしてやるぜ！」

とは言ったものの多分……と言うか、ほぼ100%勝ち目なんてないだろう。

コイツは俺より遥かに身体能力に優れているし、そのうえブレスの能力すらわかつちやいねえ。そして龍魅さんのブレスは凄いが戦闘力皆無だ。

「確か八絡さんとおっしゃいましたね？」

そんな状況下でも龍魅さんは平静を保っていた。彼女は何故あんなに余裕なのだろうか？

「ん〜どうかしたのかい？」

「提案があります」

「言ってみ〜」

「私達を見逃して下さい。それと引き換えに貴方方が神聖な教会を襲撃した事は不問にします」

それは相手にとってメリットがある話なのか？

「ん〜どうしようかな。俺は良いが部下が黙っているかどうか……」

八絡は苦笑いしながら頭をポリポリ掻いた。

「隊長！レジスタンスの奴らいませんか！教会をぶっ壊しても人っ子一人見つから……」

なんつータイミングだ。一人が報告に戻ってきやがった。

「ああ！？レジスタンスのリーダーだろ？てめえ……何のこの出て来やがる！俺様のプレス！『イージーライダー』！」

金色のバイクが顕れた。どんな能力か想像がつかないが、フルカウルの車体からは幾重にも重なった刃が敵意を向けている。

「止める六郷……どうなっても知らんぞ」

『天の矢。地の矢。交わり穿て』

「大丈夫ですって隊長！見て下さいよ！コイツお祈りなんかしてやがる！」

嘲笑うように舌を出しながら男は言った。でも様子がおかしい。これは祈りなんかじゃない。

『矢は我が剣。矢は我が四肢。矢は我が祈り』

龍魅さんの周りが歪んでみえる。いや……何か動いている？

「祈りは俺に轢き殺されてからにしろよ！」

バイクに跨がり、男はアクセルを蒸した。

『放つは矢。放つは剣。放つは祈り』

くそっ！龍魅さんがやられたら……！！

バイクは龍魅さんに向かって猛進する。

『バイクを止める！』

「クソ！速度についていけない！」

だが俺が止めずとも何の問題も無かった。

『穿つは我が敵なり』

龍魅さんが言葉を紡ぎ終わると男はバイクごと身体中を穴だらけにしていた。

血液は何処を流れて良いのかわからなかったのだろうか。吹き出す事無く滴り落ちていた。

「龍魅さん……これは一体」

「初めて見たよ。『祝詞』だっけ？ブレスを越える力かもしれんな」

第21話 本拠地

龍魅さん……人を殺すのに躊躇わなかったな。俺はどうだ？あのガキを殺そうとしただろ？

「分が悪いな。一先ず撤収するか」

「そうですか。では私達も帰りましょう」

龍魅さんは八絡に背を向け歩き出す。見逃して良いのか？龍魅さんならコイツにも勝てる気がするんだが。後ろでは頭を掻きながら小型のマイクで撤退を知らせていた。

「龍魅さん……さっきのは何なんだ？」

一撃で人間を絶命する力。奴は祝詞って言ってたな。

「祝詞……神から授かった言葉です。顕現を行使するように祈りを籠めて発すれば、言葉に秘められた現象が発現します」

「つまり……魔法？」

龍魅さんは少し微笑んで、そのようなものです、と肯定した。

「これから何処に行くんだ？」

「私達の本拠地に向かいます」

「遠いのか？」

「ええ。ですが皆そこに居ます。勿論春日さんも」

由弥が着いた直後に移動したのか。あいつ相当ぐずったろうな。

「なあ龍魅さん」

「何ですか？」

「俺を強くしてくれ。奴らに負けなくらい。由弥を護れるくらい」

龍魅さんはまた微笑んで頷いた。

……………。

……………。

頭痛えな。俺どうしたんだ？

確か変なガキがいて…………… なんか吹っ飛ばされた。

「おい鳴海ー！ うんこ野郎ー！ バカツプルのバカの方ー！」

返事はない。ただのバカのような。

「ちくしょーめ。ん…………… ホウウウ！？」

俺のバイクがボコボコに！？

「うう……あいつが帰ってきたら絶対修理代請求してやる……」

さて……頼まれ事を済ますか。

第22話 ペイン

眼の前に水で満たされたコップがある。

『水だけを上に持ち上げる』

俺の想像通りに水は数メートル上に持ち上がる。

『水を文字に変える』

水は春日由弥と形を変える。水そのままコップに戻った。

「ふう……完璧過ぎる」

やはり言葉に出した方が精密な動きが出来るな。

誰もいない殺風景な部屋。白い床。白い壁。白を基調にしているのは龍魅さんの趣味だな。

「よう！鷹丞。調子はどうだい？」

突然の来客は全身黒い服で覆われていた。ただ笑っている白い仮面だけが異彩を放っている。

「最高だよペインさん。本名教えてくれ」

「H A H A H A！そいつは断る！だが貴様に一つ良い事を教えてやるっ」

「何？」

「攻撃は最高のタイミングで行うべきだ！最高の距離！最高の角度！最高の精神状態！最高の破壊力！最高の速度！それがあれば二撃目は要らん！示現流は良い！二の太刀要らずとは良く言ったものだ」

ペインさんは大袈裟な身振りで語り出した。

「いつもの教訓じゃないですか。それにペインさんの武器銃だし……」

「俺のコンバットマグナムは命だ！」

「うわ……」

ペインさんは愛銃を取り出しほお擦りし始めた。実際は仮面だけど。

ペインさんのコンバットマグナムには弾丸が一発しか入ってない。敵は必ず一発で仕留めるのが信条なのだそうだ。でも敵が複数の場合はどうするのだろう。

「で。何かようですか？」

「おー忘れてた！昼食が終わったら作戦室に集合だ。冷が作戦を伝える」

やっときた。この三ヶ月の努力が報われる時がきた。

「またな鷹丞鳴海」

「はい」

ペインさんは高笑いしながら去っていった。

「とことん変人だ……」

良い人で、何より無茶苦茶強いんだけどな。

此処での唯一の楽しみの食事だ。さっさと行こう。俺は部屋を後にした。

第23話 あーん

レジスタンスの本部には個室の他に食堂や鍛練室、作戦室等ある。表向きは貿易会社のビルだが、地下8階に渡り広がっているのだ。

俺は詳しく知らないが、どうやらスポンサーが付いているらしい。

食堂に入ると見知った後ろ姿を見かけた。

「よお由弥。ふむふむ。今日はサラダうどんか。相変わらずヘルシ―真っ盛りだな」

「気をつけないと直ぐ太るの。貴方には無関係かもしれないけど」

「おばちゃん！俺、牛丼と豚汁と納豆と卵焼きと炒飯とチキンカツね！」

はいよー！っと粹のいい声が聞こえた。

「身体動かしてるからな。食わないと身がもたん」

「……本当に貴方も戦うの？」

由弥の瞳が揺らぐ。だが俺の決意は揺るがない。

「ああ。お前も俺も奴らから狙われてんだぜ？大人しくやられてたまるかよ」

「人を殺すかも知れないのに？」

「……………わからない。人を殺すのは恐いさ。恐くない訳がない。でもそれより……………」

「それより？」

「いや、なんでもない。それより飯が出来上がったみたいだ。一緒に食べよう」

由弥はそれ以上追求せずに席についた。

飯の後はいよいよ作戦室だ。いやがおうでも気が高ぶる。

「あーん」

「何それ？」

こいつはアホか。見れば分かるだろ。

「あーんだよ、あーん。俺のカツを分けてやるってんだから有り難く受け取れ」

由弥は辺りをキョロキョロ見渡し、頬を赤らめて口を開いた。

「あ、あーん」

カツが由弥の口に入る寸前に箸を引っ込め、自分の口に放り込む。

「きゅ！？」

「ケケケケケ！誰がやるか！」

「……………死になさい」

怒ってんな。

「作戦終わったらチューしてやるよ。だから許せ」

「……………ばーか」

「これは手厳しい」

さあ由弥のからかい貯めも済んだし、作戦室に行こう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5719e/>

明日は君を殺そう

2010年10月31日04時11分発行